両輪の轍

一九六九年一月　東京大学安田講堂

「機動隊の諸君に告ぐ、機動隊の諸君、直ちにここから撤退したまえ」

東京大学安田講堂から拡声器をとおして聞こえてくる学生の声が一月の凍てつくような空気に覆われた東京大学の敷地内に響き渡った。

この年の東大安田講堂は学生達に占拠されていた。収容人数千人を超え、日本のアカデミズムを象徴するランドマーク的存在であった安田講堂は、今では変革を求める学生達の象徴に様変わりし始めていた。ヘルメットを被り、顔をタオルで覆い隠して手にはゲバ棒と呼ばれた角材を握っている学生達により様相が立てこもりを続けている。そして学生達はやがて踏み込んでくる機動隊を迎え討つため、構内の階段や廊下など至る所に椅子やスチール棚などを使ってバリケードを構築し、そして講堂の上部階から外を見渡せる場所に陣取る学生の足下には火炎ビン、コンクリート片などが用意され、突入してくる機動隊に向けていつでも投げつけられるよう準備が整っていた。安田講堂は要塞と化していた。

安田講堂を占拠した学生の数は約四百人に達し、そのほとんどは学生が結成した組織、全学共闘会議「全共闘」のメンバーであった。大学との対立は生半可なものではなく、武力行使を辞さぬ気概もって安田講堂を占拠していた。

一九六〇年代は全国の大学で大学闘争が活発におこなわれていた時代であり、東京大学安田講堂事件は大学闘争を象徴する事件となった。また、学生達は大学闘争だけでなく当時の社会に対する運動にも積極的に活動していた。日米安保問題、ベトナム反戦運動、羽田闘争など、当時の学生達は社会問題を『声』に挙げるだけでなく、自らがデモ行進をしたり、時には機動隊と衝突したりと『行動』を起こしたのであった。彼等は行動こそ日本社会を変えられると信じていたのである。誰かが変えてくれる、ではなく、自ら行動することこそ、改革につながると。

当然、安田講堂を占拠した学生達（全共闘）も『行動』し、改革を求めたのである。事の発端は医学部の劣悪なインターン制度の改善を医学部の学生達が要求したことから始まった。それに対して大学側は彼等の要求を受け入れることはせず、大学側は運動に関係した学生十七名の処分を行った。しかしその対象の学生には無関係の学生も含まれていたのである。この大学側の対応が学生達に更なる怒りを招くこととなり、ついには全共闘が安田講堂占拠に至った。それに対して大学側が彼等にとった行動は「対話」ではなく機動隊導入だった。

小久保正明も同じ信念を持った東大生だった。彼は理学部の学生で解剖学や組織学では医学部とともに授業を受けていたこともあり、解剖学授業の実習後期には医学部の学生と冗談を言える仲までになり、彼のなかでは医学部の学生が身近な存在になっていた。そしてその医学部の学生が大学側より処分されたのを知るや、小久保は怒りが収まらず、自らも行動することを決意して全共闘に参加したのである。

小久保は安田講堂に立てこもった学生達への食料を運ぶ役割（学生達からは「弁当運び」と呼ばれていた）を任せられていた。この日の朝も小久保は食料を届けていた。拡声器からの声が響き渡るなか、食材が詰め込まれたマジソンバッグを二つ両手に持ちながら小走りで歩き、やがて安田講堂の裏側にある茶褐色のアーチ型ドアの前に着いた。小久保はバッグを足元に置いて息を整えると寒さでこわばった手を口元に寄せると息を当てて両手を温めたあとドアを力強く叩いた。

「誰だ！」中から男の声が聞こえた。

「食料です！」小久保は中の男に聞こえるよう大声で言った。

重厚な茶褐色のアーチ型ドアがゆっくりと開き始めたと同時にヘルメットを被った男が小久保の目に入ってきた。男が被っている白いヘルメットは汚れが目立ち、白い塗料はところどころ剥げ落ちて、いかにも使い古されたヘルメットであった。しかし小久保には、そのヘルメットが単なる古びたヘルメットの印象はなかった。それはヘルメットに黒字で書かれている「全共闘」の文字により新鮮かつ力強く感じられアドレナリンが一気に分泌された。俺もそのヘルメットを被り中で闘いたい！

「おう、入れ」男は小久保に言った。

小久保はマジソンバッグ二つを両手に持つと講堂内に入った。中は静まりかえり、空気は外同様に冷え込んでいた。

小久保は食料が入ったマジソンバッグを床に置いた。

「ありがとう」男はバッグを見ながら言った。男は小久保に顔を向けた。「どうだ、奴らの様子は」奴らとは、機動隊のことである。

「機動隊の車両が病院の前に続々と到着しているようです」小久保はここに来る途中、大学に隣接している東京大学医学部付属病院の前をとおり、そこで多数の機動隊の車両が縦列駐車しているのを目にしていた。

「そうか、いよいよだな」男はポケットから煙草を取り出すと火をつけた。「すぐに奴らは突入してくるだろう。じきにここは包囲され、君から食料も受け取ることはできなくな

る」男はもう一度煙草を吸い、大きく煙を吐き出した。「やがてこの砦は落ちる。しかし俺達は最後まで諦めず馬鹿な帝国主義的管理を行っている大学やそれを擁護している政府と命を刺し違えても戦ってやるまでだ」
「また食料を持ってきます」
「ああ、頼むぞ」男は手を差し出した。
　小久保は手を伸ばし、力強く握手を交わした。
　小久保が講堂から出ようとした際、男の背後にある壁に書かれているスローガンに気がつき、足を止め壁の文字を読んだ。
『連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する』
　小久保は男に顔を向けた。「私もここに残ります！　大学が警察に通報して大学自治を崩壊させたことに納得できません。この状況を招いた無秩序な日本に変革を――」
「いいんだ」男は小久保の言葉を遮った。「東大を制する者は全大学を制する。それを実現するためには各々自分に果たされた役割を実践しなければならない。君の役割はここに残って戦うことではない。それぞれが自分の担っている役割を全うすることだ。君達がいるからこそ我々はここで踏ん張ることができるんだ」男は小久保の肩に手を当てた。「食料がなきゃ、俺たちは戦えん」そう言いながら小久保を外に出るドアまで近づけた。男はドアを開けてゆっくりと小久保の背中を押した。小久保は男に押されるがまま講堂の外に出た。小久保は振り返り男にもう一度自分も安田講堂に残りたい意志を言いかけた。
「そうだ」男が小久保の言葉を遮った。そして口元に笑みを浮かべながら言った。「次は豚汁の材料を持ってきてくれ。この寒さは正直かなわん」
　小久保は男を見つめた。機動隊との戦いが始まれば食料搬入が出来ないことは承知のはずだ。そして機動隊との戦いはすぐにでも始まる。きっと永の別れになるのだろう。しかし小久保は否定せずうなずいた。
「分かりました」小久保はいったん口を閉ざし、再び口を開いた。「あなたたちは構内で闘い、私たちは外で闘います。あなたたちの勇姿、決して忘れません」
　男はうなずくと、吸っていた煙草を足元に捨てるともみ消した。男は小久保をしばらく見つめた後に言った。「君の名前は」
「小久保、小久保正明です」
　男はしばらく小久保を見つめた後に言った。「小久保君、将来の日本で君を必要とする時

が必ず来る。その時まで今の志を忘れるなよ。じゃあな」男はドアをゆっくりと閉めた。

小久保は講堂のドアがしまるとドアに背を向け歩き始めた。講堂脇にある狭い階段を上り、講堂正面側に来ると足を止め、辺りを見回した。拡声器の声が止んでいるのに気がついた。静寂が安田講堂を包み込んでいた。時折、北風が吹き銀杏並木や楠の枝を大きく揺らしている。まるで嵐の前の静けさだ。小久保は思った。強い北風が小久保の肌を突き刺し、小久保は反射的に体をこわばらせた。小久保は歩き始めると、正面入り口のそばに立つ巨木の言葉がふさわしいくらい成長した楠の下を通り過ぎ、講堂正面から正門に延びている銀杏並木路に入った。

人影がない並木路を正門に向かって歩き、ちょうど並木路に沿って建つ法・文学部二号館の出入り口を通り過ぎた時、背後から小走りする足音が聞こえ自分に近づいて来るのを感じた。小久保が振り向こうとしたその時、両腕を背後から強く抱え込まれた。

「警察だ！　おとなしくしろ！」

小久保はその声の主に顔を向けた。小久保の腕を抱え込んだ者は紺色の制服をまとい、紺色のヘルメットを被った男二人、機動隊だった。小久保は機動隊の語気の強さと敵意を曝け出す目つきから怒りを感じ取った。

「何のつもりだ！」小久保は怒鳴った。

「来い！」機動隊の一人が言った。

小久保は両腕を抱えられながら、力づくで体の向きを変えられ法・文学部二号館裏側にある道に連れて行かれた。そして道沿いに建てられている浜尾新の銅像の前で足を止めた。小久保は男達の顔を見ると、二人とも同じ方向に視線を向けていた。そして男達は小久保を抱えたまま、直立不動の姿勢をとった。

小久保が男達の視線の先に目を移すと、小久保の視界に一人の機動隊が近づいてくるのが目に入った。男は身長百八十ほどの大柄で、制服の上からでも胸板が厚いのが見て分かる。贅肉のないがっしりとした体格は、まるでプロレスラーの坂口征二が機動隊の制服を着ているように見えた。きっと指揮官だろう。小久保は直感した。

その男は小久保の正面まで近づいて足を止めた。

「君は弁当運びだな」その男の口調は穏やかだった。「学生さん、俺達は中にいる君の仲間を傷つけたくはない。双方無傷で終わりにしたいんだ」

小久保は男を見つめた。男の表情は穏やかで、怒りで顔がこわばっている二人の隊員とは対照的であった。男の表情には小久保に対する怒りが感じ取れない。

「教えてくれないか。出入口の中はどうなっている。すぐにバリケードがあるのか。その周囲には学生が何人いる」
「まるで捕虜だ」小久保が言った。
「これは戦争じゃない。そしてここは戦場でもない」男は視線を安田講堂に向けた。「君たちは過激派とは違う。学生だ。ただ問題解決の手段を間違えただけだ」
「解決の手段を間違えたのは大学側だ！」小久保は怒鳴った。「これは学生と大学の問題であり警察に通報した大学側こそ民主主義を抑圧している！」
「だからバリケードを構築して籠城ってわけか」男は顎で講堂を指しながら言った。
「大学側が警察に要請した結果だ。当然な手段だ」
「君たちはゲバ棒だけじゃなくニトログリセリンや青酸化合物なども持ち込んでいる噂も出てる。我々が来た事も必然だよ」男は腕時計を見た後、小久保に目を向けた。「これは残念な出来事だ。もう時間がない、頼むから構内の状況を教えてくれないか」
「残念な出来事だって？　これこそ必然な行動だ。ここで起きている事を肌で感じれば、民衆も声を出し行動を起こして変えていかなければと決心するはずだ！」
「黙れっ！　この若造！」小久保を押さえていた隊員が怒鳴り、小久保を力強く押さえ込み、ひざまずかせた。隊員は右手の拳を振り上げ殴りつけようとした。
「やめんか！」男は隊員が振り下ろそうとする拳を制止させた。
「しかし隊長、こいつらは俺達を殺そうとしている奴らですよ」
「いいからその拳を下ろせ」
　隊員は、しばらく男を見た後に拳をゆっくりと下ろした。隊員は殴ることを諦めたが、彼の眼光は憎しみに溢れ、学生達の事を受容する気持が微塵も無いことを伝えていた。
　男はひざまずいている小久保をしばらく見つめた後、視線を遠くで待機している機動隊に向けた。男は大きくため息をついたあと、隊員に視線を移した。「時間だ。連れて行け」
　男はそう言うと、踵を返して歩き始めた。
　二人の隊員が小久保を立ち上がらせた。
　小久保は男の後ろ姿を見ると、男が右手に抱えているヘルメットに目が留まった。そのヘルメットの後ろに付いている綴状のプロテクターに般若面のイラストが大きく描かれていた。小久保は般若面と目が合ったように感じ、血の気が引いた。男は俺に対して冷静な態度を見せていたが、いざ闘いになれば鬼となるのだろう。
「歩け！」隊員が小久保に言った。

小久保は向きを変えられ、男の姿が視線から消えていった。そして両脇を押さえられながら連れて行かれた。その途中、背後から男の声が聞こえた。
「第四機動隊第一中隊！」
小久保はその声を聞いた途端足を止め、声が聞こえてきた方に顔を向けた。『警視庁第四機動隊』この名前は全共闘の学生達の誰もが知る名前だった。第四機動隊は過激派からどんな抵抗を受けても退くことをしない屈強な機動隊として知られ、ついには『鬼の四機』と呼ばれるようになった。その『鬼の四機』が今、小久保の視線の先に整列していた。彼等は紺色の制服にヘルメットを被り、ジュラルミン製の盾を構え、乱れなく整列している。そして小久保に話しかけたあの男が整列している鬼の四機達に向かって立っていた。般若面のヘルメットを被り、両手を腰に当て仁王立ちで構えている姿はまるで恐れを克服した歴戦の猛者に見えた。
「突入準備！　できれば双方負傷者を出したくない。自分を見失わず、これまでどおり冷静に職務を全うせよ！」
「おー！」機動隊の雄叫びが響き渡った。
小久保には声を上げた機動隊が、まるで古代ギリシアで最強の戦士と言われたスパルタ戦士を彷彿とさせた。機動隊は剣こそ持っていないが、鍛え上げられた体で盾を構えた男達は微動だにせず、指揮官の命令を待っている。まるで猟犬が合図を待つように。合図がでれば牙をむき出し獲物に向かって容赦なく襲いかかるだろう。
小久保の体が震え始めた。これから安田講堂の学生達はこの『鬼の四機』と死闘を交わす……勝てるわけがない。
「突入！」
叫び声に近いその声は、小久保の耳にまでよりはっきりと聞こえるほどだった。
これを合図に後世に名を残す安田講堂の約三十五時間に及ぶ双方にとって過酷な戦いが始まりを告げた。そして同時に小久保の安田講堂の戦いはここで終わり、彼の学生運動も終止符を打った。しかし、この時代で闘った男たちの信念は生涯消えることはなかった。